

益田市匹見町埋蔵文化財調査報告第49集

市内遺跡詳細分布調査報告書XVIII

2006年3月

島根県益田市教育委員会

市内遺跡詳細分布調査報告書XVIII

2006年3月

島根県益田市教育委員会

序

本書は、国庫補助を受け17年度に実施した匹見地域における市内遺跡詳細分布調査報告書であります。本報告のとおり「中山間地域総合整備事業（益美2期地区）」そして「石ヶ坪遺跡範囲確認調査」の2事業に伴って、うち3地点を調査したものであります。

調査の結果、広戸B地点では遺構は発見されていませんが、縄文後期前半期の遺物が多量に出土し、遺物の多さからみて該当期における集落跡であった可能性が推定されます。こうした貴重な遺跡でありますので、引き継ぎ記録保存のための調査を実施してきたところであり、次年度において当遺跡の報告書の発刊に期待したいと思います。ご承知のとおり、匹見は縄文遺跡が豊富な地域で「あんな山間地で、今から4,000年前のものが・・・」という疑問もあろうかと思いますが、狩猟・採集を基調とした縄文時代においては、落葉広葉樹林帯で覆われた該当地が最良なエリアであったことを示唆していることにはかなりません。

なお、向屋敷地点では遺跡を捉えることはできませんでしたが、石ヶ坪遺跡地点における範囲確認調査においては頭初の目的が明確に達せられ、一応の成果を得ることができました。

これらの資料は、益田市の歴史文化のみならず、考古学研究者にとっても貴重なものであり、その認識と理解のための助けとして活用いただければ幸いです。最後になりますが、調査に際してご理解いただきました地域の方がた、そして寒暑の中で精を出してくださいました作業員の皆さん及び、関係各位にお礼を申し上げ、序文といたします。

平成18年3月6日

益田市教育委員会

教育長 陶 山 勝

例　　言

1. 本書は、平成17年度国庫補助事業として、益田市教育委員会が行った市内遺跡詳細分布調査の報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て、次のような体制で実施した。

調査主体	益田市教育委員会			
調査指導	島根県教育委員会文化財課職員			
	山口大学人文学部教授		中村友博	
事務局	益田市教育委員会教育長		陶山勝	
	益田市教育委員会 文化振興課長		安達正美	
	益田市教育委員会 文化振興課 文化財係長		木原光	
	益田市教育委員会 文化振興課 主任主事		山本浩之	
主任調査員	益田市教育委員会 文化振興課		渡辺友千代	
調査員	益田市教育委員会 文化振興課	主任主事	山本浩之	
調査補助員	益田市教育委員会 文化振興課		栗田美文	
発掘作業員	斎藤 幸夫	藤井 一美	田中 莫	山崎善乎
	村上 豪	渡辺 婦友子	上原 弓子	大賀 幸恵
	大谷 真弓			
遺物整理員	大賀 幸恵	大谷 真弓		
調査協力	渡辺 聰			

3. 調査に際しては、土地所有者をはじめとして、地元の方々に終始多大なご協力をいただくとともに、また島根県益田農林振興センター、匹見総合支所建設課の各担当者にも多大なご協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

4. 本発掘調査では遺跡としての有無にはかかわらず、總て調査地は○○地点という呼称方法をとった。なお、本調査に関する資料等は益田市埋蔵文化財匹見調査室で保管している。

5. 編集にあたっては、前掲の調査員・調査協力員らの協力を得て、執筆・編集は渡辺・栗田が行った。

目 次

第1章 発掘調査に至る経緯と経過	(渡辺)	1
第1節 発掘調査の経緯		1
第2節 発掘調査の経過		1
第2章 調査地区的環境	(渡辺)	2
第1節 はじめに		2
第2節 石谷の内谷地区の環境		2
1. 立地的環境		2
2. 歴史的環境		2
第3節 石ヶ坪遺跡周辺の環境		3
1. 地理的環境		3
2. 歴史的環境		3
第3章 各調査地点の概要	(栗田・渡辺)	5
第1節 広戸B調査地点		5
1. はじめに		5
2. 調査区の設定		5
3. 調査概要		5
(1) 堆積層序と遺物包含層		5
(2) 遺構の状況		8
4. 出土遺物		9
(1) はじめに		9
(2) 実測土器		10
(3) 実測石器		11
5. 成 果		12
第2節 向屋敷地点	(渡辺)	12
1. はじめに		12
2. 調査対象地とした理由		13
3. 調査区の設定		13
(1) 調査区の設定		13
(2) 層序のようす		14

第3節 石ヶ坪遺跡地点	(渡辺)	14
1. はじめに		14
2. 調査区の設定		15
3. 調査概要		16
(1) 堆積層序と遺物包含層		16
(2) 遺物出土状況		17
4. 出土遺物		17
(1) はじめに		17
(2) 実測遺物		18
・土器類		18
・石器類		20
5. 成 果		21

挿図・図表目次

第1図 調査地位置図	2
第2図 広戸B調査地点と周辺の遺跡	5
第3図 調査区配置図	6
第4図 土層図	7
第5図 実測土器（1）	9
第6図 実測土器（2）	11
第7図 実測石器	12
第8図 向屋敷調査地点と周辺の遺跡	12
第9図 調査区配置図	13
第10図 土層図	14
第11図 石ヶ坪遺跡調査地点と周辺の遺跡	15
第12図 調査区配置図	15
第13図 土層図	16
第14図 実測土器	19
第15図 実測石器	20
第1表 広戸B地点遺物集計表	8
第2表 石ヶ坪遺跡地点遺物集計表	17

図版目次

図版1 広戸B地点

1. 南西からみた調査地点の遠景
2. 北東からみた調査地点の近景

図版2 広戸B地点

1. 発掘風景
2. 土器片の出土状況
3. 土器片の出土状況
4. 石器の出土状況
5. A調査区の堆積状況（北壁）
6. B調査区の堆積状況（東・南壁）

図版3 広戸B地点

1. C調査区の堆積状況（北壁）
2. D調査区の堆積状況（西壁）
3. A調査区の完掘状況（南から）
4. B調査区の完掘状況（北から）
5. C調査区の完掘状況（南から）
6. D調査区の完掘状況（南から）

図版4 広戸B地点

1. 縄文土器片の出土状況
2. 黒耀石片の出土状況
3. 実測土器（1）

図版5 広戸B地点

1. 実測土器（2）
2. 実測石器

図版6 向原敷地点

1. 北からみた調査地点遠景
2. 南からみた調査地点遠景
3. A調査区の完掘状況（南から）
4. B調査区の完掘状況（南から）
5. C調査区の完掘状況（南から）

図版7 石ヶ坪遺跡地点

1. 北北東からみた調査地点遠景
2. 北東からみた調査地点近景

図版8 石ヶ坪遺跡地点

- 1. 発掘風景
- 2. A1調査区の遺物出土状況（南東から）
- 3. B5調査区の遺物出土状況（南西から）
- 4. C2調査区の遺物出土状況（南西から）
- 5. A1区の堆積状況（南東から）
- 6. B1区の堆積状況（南東から）

図版9 石ヶ坪遺跡地点

- 1. B2区の堆積状況（南東から）
- 2. B3区の堆積状況（北西から）
- 3. B4区の堆積状況（南西から）
- 4. B5区の堆積状況（北西から）
- 5. C1区の堆積状況（北東から）
- 6. C2区の堆積状況（南東から）

図版10 石ヶ坪遺跡地点

- 1. 実測土器
- 2. 実測石器

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯

今回の詳細分布調査は、島根県益田農林振興センターによる「益美2期中山間地域総合整備事業」と、益田市が行なった「石ヶ坪遺跡の範囲確認調査」の2事業に伴って実施したものである。

前者は平成16年7月26日（益農第1495号）付で、匹見町（現益田市）宛に、同事業に伴って埋蔵文化財の有無について協議したい、との旨によって発生したものであった。匹見町教育委員会は本件に伴い、平成16年8月6日（匹教第146号）において、まず両者による周知遺跡の確認や、立地的にみてその可能性が高い、と判断される地点等を踏査したいと通知したのであった。その後、これに基づいて踏査は同年8月11日に実施し、本報告のとおり2地点（広戸・向屋敷）を選定したのである。

そして後者事業は、滑石混入土器が多量に出土したことで顕著な石ヶ坪遺跡（市指定）でありながら、その明確な範囲確認がなされていなかったことから、益田市が本事業を通して実施したものである。

第2節 発掘調査の経過

右谷の内谷地区の圃場整備事業に伴うものは、広戸・向屋敷という2地点という箇所数的に極めて限られて実施したが、これは周知の遺跡が少ないということ、そして狭小な谷地という立地が最大の理由である。しかも圃場整備事業が本地区全域に及ぶものではなく、モザイク状に部分的に整備されるといった状況から生じたものであった。

広戸地点のものは平成17年4月14日から同年5月31日まで、2mの方形のものを4区設けて実施した。その結果、本報告のとおり5層から縄文後期前半期のものを中心に、また4層からは縄文晚期のものが少量を検出され、遺跡であるということが判明したのであった。また1.5km上流の向屋敷地点のものは、同年6月2日から同13日にかけて実施したが、文化遺物は捉えることができなかつたのであった。

そして、石ヶ坪遺跡の明確な範囲確認のための調査のことであるが、本事業のものは同年10月3日から、おもに未調査域を中心して2m方形のものを8区設けて同31日まで実施した。その結果、地点によって遺物包蔵層また無遺層とが判明し、頭初の目的が一応達成されたことは本報告のとおりである。

なお、本事業の発掘に至る経緯と経過を述べたが、調査期間中、平成17年6月20日には、山口大学人文学部の中村友博教授を招請し、調査指導を得た。そして島根県益田農林振興センターの安部正志氏には係る事業の援助を受けるとともに、また地区の皆様方のご協力などがあつて、無事に終了したことをご報告しておきたい。

(渡辺)

第2章 調査地区の環境

第1節 はじめに

益田市匹見町（旧美濃郡匹見町）は、益田市域の南東端にあたり、その南側は中国山地の脊梁を境にして山口・広島の2県に接するという位置にある（第1図）。

こうした位置にある匹見町において、調査は圃場整備事業に伴う匹見町石谷の内谷地区のもの、そして同町紙祖の右ヶ坪遺跡における明確な範囲確認のための2事業を行なったものであるが、ここではその2地区的環境などについて概説していくことにしたい。

第2節 石谷の内谷地区の環境

1. 立地的環境

石谷は町域の西側に位置し、河谷は内石川や清谷川などを集めて石谷川となって北東流し、下流で匹見川の本流と相会している。標高は低位部で約250m、南西側には600～800mを測る山地が3方からはだかり、そこは照・落葉の混生樹林が繁茂しているという環境下にある。また生活などの人文活動域の標高は凡そ300m前後で、おもに農・林業を中心として活計されてきた地区である。

石谷というのは、旧匹見町の7大字（おおあざ）のうちの1地区で、さらに本流石谷川と有支流の内石川両流とで2つの字（あざ）に分かれ、前流域を内谷（うつだに）、後者を内石（うついし）といい、圃場整備事業に伴って事前調査の予定地は前者の内谷という地区である。

そこは北東流する石谷川沿いの谷地に拓かれた地区で、清谷・柄原・奥後谷などの小河谷が発達しているものの、山地との落差が激しくV字峡谷を形成し、谷平地といわれるものは極めて少ない。こうした立地のため、農・林業を中心として活計されてきたものの振わず、明暦2（1656）年の村高は180石余り、戸数53戸を数えたものの、現在は（平成17年）36戸、人口67人となって過疎化が著しい。また、近世には石見半紙といわれた製紙も盛んに行なわれ、その余命ともいいくべき紙幣の原料とする三桠栽培も昭和50年代までつづいたが、今は絶え、林業・製炭のほかにシイタケやコンニャク栽培も衰頽しつづける一方で、随一の公共機関であった小学校も昭和6

3年に廃校になったという状況下にある。

2. 歴史的環境

こうした状況は、立地的にも第1次産業に頼るほかなかった、ということに生じたものであろうが、ただ周知の遺跡などの痕跡から辿ると、けして貧弱とはいえるものではなかったことが窺われる。

例えば、調査地点に隣接する広戸A



第1図 調査地位図

遺跡では、縄文中期末から同後期前半の集落跡がみられ、また 500m 下流の左岸には同後・晚期のものと想定される磨製石斧、そして状兆耳飾りが採集されている土井田遺跡が存在する。そして内石地区に入るものの、その字(あざ)境には古墳時代末期のものと思われる田原古墳などあって、本地区における原始・古代が皆無でなかったことを物語っているのである。また、中世期のものには大谷・猪俣氏が拠ったという花ノ木城跡が調査地点の 100m 下流にあり、おそらく前述の土井田遺跡の地名も該当期に因縁づくものであろうと考えられる一方、その指呼には近世期に匹見組の割元庄屋も務めたという猪俣氏の墓地が存在するなど、歴史的環境は整っている地区であるともいえる。ただ、南西方向に谷筋がのびて市・町（津和野町）境へと至る上内谷といわれている所には今のところ、周知の遺跡はみあたらないという違いがみうけられるが、今後の調査に期待したいところである。

第3節 石ヶ坪遺跡周辺の環境

1. 地理的環境

詳細な範囲確認調査のために実施した石ヶ坪遺跡は、同町紙祖（しそ）地区に所在するが、さらに細かく字（あざ）名でいうと「元組」といわれているところに当る。該当地、その周辺には各時代を通じた遺跡が多く、とくに原始・古代遺跡は顕著である。このことは歴史的推移していく中で、各時代ごとに受け入れられ、それを消化していく資源・立地などが、適合あるいは偏わっていた地区であったからにほかならないと考えられる。

地勢からいうと、中生代白亜紀の火山活動による流紋質凝灰岩で生成された数条の地溝帯（匹見層群『中国地方地学事典』）下に形成された立地にある。その地溝帯の中でも、北東—南西方向に走る“臼木谷断層”という中国山地中最大級のものであり、その南西端にあたる本地区では、同地溝帯に沿って肥沃な谷平地を形成して紙祖川が流下しているが、その流域幅は最大で約 500m（狭小で 300m）測って 2.5 km 下流の匹見中央部で匹見川と相会している。この肥沃な沖積地は本町においては最たるものといえ、永く穀倉地として利用されてきたのであった。

また、人文活動域の標高は 250～300m、そして四周する山地は 500～800m を測って、そこには流域地を中心にカシ・ツバキなどの照葉樹もみられるが、クリ・アカマツなどの、ほとんどは落葉のコナラ・ミズナラといったナラ林帯で占められる。そういう山地にはタヌキ・キツネなども生息しているが、ツキノワグマ・サル・イノシシといった中動物による被害も、スギなどの植林のために最近は多く出没する。一方、河川にはハエ・アユ・ゴギ・ヤマメ・ケガニなどが生息し、昭和の中ごろまではサケ・マスといった冷水魚が遡上していたといわれるなど、自然豊かな環境下にある地区である。

2. 歴史的環境

本地区的近世期は、匹見組のうちの西村といわれ、石高は 300～400 石で推移し、匹見組内でも最大な穀倉地でもあり、明暦 2（1656）年では 136 戸を数えた。また、初期の代官所は本地に置かれていた（第 11 図—屋敷田遺跡）といい、「紙祖」といわれているとおり、とくに該当期には石見半紙の製紙は盛んに行なわれていたのであった。そして、同郷中で 20 数箇所存在する山城跡の

中でも、最大級といわれる小松尾城跡が調査地点の対岸の200mに屹立しているとともに、北東側400mの指呼には宗教（経塚）遺跡としての森ヶ溢遺跡が分布している（第11図）など、本地区における中世期の遺跡もけして暗いとはいえるものではなかったようである。

殊に原始・古代遺跡に至っては顕著で、それらも狭長の紙祖川が形成した河岸段丘に集中しており、該当期においては特に本地区が好適地であったことを窺わせる。例えば方形堅穴住居が検出されている長グロ・下正ノ田遺跡がそうであり、同期のものとしては善正町遺跡もあげができる。そして縄文時代のものを捉えるならば、磨製石斧が採集されているツリ付下遺跡、散布地としての前田遺跡がある。こうした縄文遺跡が分布する中で、中・後期の石ヶ坪遺跡もそうであるが、配石群が検出された晩期の水田ノ上A遺跡からは、該当期における成熟した生活集団がいたということは、本地区的歴史的環境が、いかに適合していたものであったのかを物語っているといってよかろう。

（渡辺）

第3章 各調査地点の概要

第1節 広戸B調査地点

1. はじめに

本詳細分布調査は、島根県益田農林振興センター「中山間地域総合整備事業（益美2期地区）」に伴い、それに先立ち試掘調査したもので、平成17年4月14日から同年4月31日にかけて実施したものである。本調査地点は、島根県益田市匹見町石谷口369番地ほかに所在し、そこは周知の遺跡である広戸A遺跡に隣接する水田地であった（第1図）。

該当地は、40m西側を石谷川が比高約6mを測って北流しているが、顕著な河岸段丘を形成しているものではない。緩やかに河岸に沿っているという立地にある。その石谷川が形成した周流地は東一西方向の最大幅約120m、北一南方向の長さ約400mを測った小規模なものである。そうした河沿いや山裾には水田と化されている。一方、その流路に沿って北一南方向に市道内谷線が貫道し、また沿道に民家などが点在するといった景観下にある（第2図・図版1）。

2. 調査区の設定

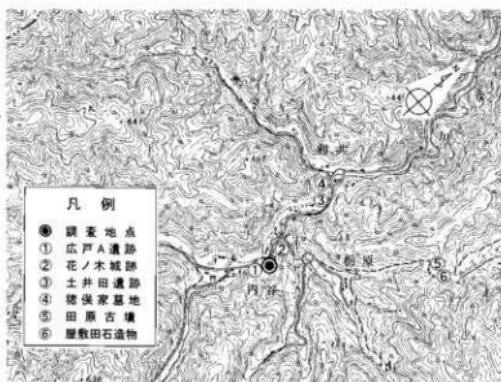
調査区の設定にあたっては、広戸A遺跡の南側に接する北東一西南方向に細長い3段からなる水田を対象としたのである。現地表面標高は上段のものが336.4m前後、中段は約335.8m下段は約335.5mを測って、その高低差は約90cmであった。

まず、それらの各水田のほぼ中央部に2mの方形区を1区ずつ任意に設けて掘削調査することにし、そして掘削の段階で、中段の水田に設定したB区と仮称した5層から縄文遺物が多く出土したため、そこでそのB区の北東側にも同様な調査区を設けて文化層の広がりの把握につとめたのであった（図版2-1～2-4）。したがって平面調査面積は、4区の16m²ということになり、区名はアルファベットの大文字を用いて、上段のものをA区、そして中段の上流側からB・C区、下段のものをD区と呼称することにしたのである（第3図）。

3. 調査概要

（1）堆積層序と遺物包含層

各調査区における堆積上の状況は、上位の1～3層以外は異なった堆積の仕方であった。とくにC・D区の4層から基盤層に至るまでの層序状況は、全体的には数次によるとみられる異質な粘土



第2図 広戸B地点と周辺の遺跡

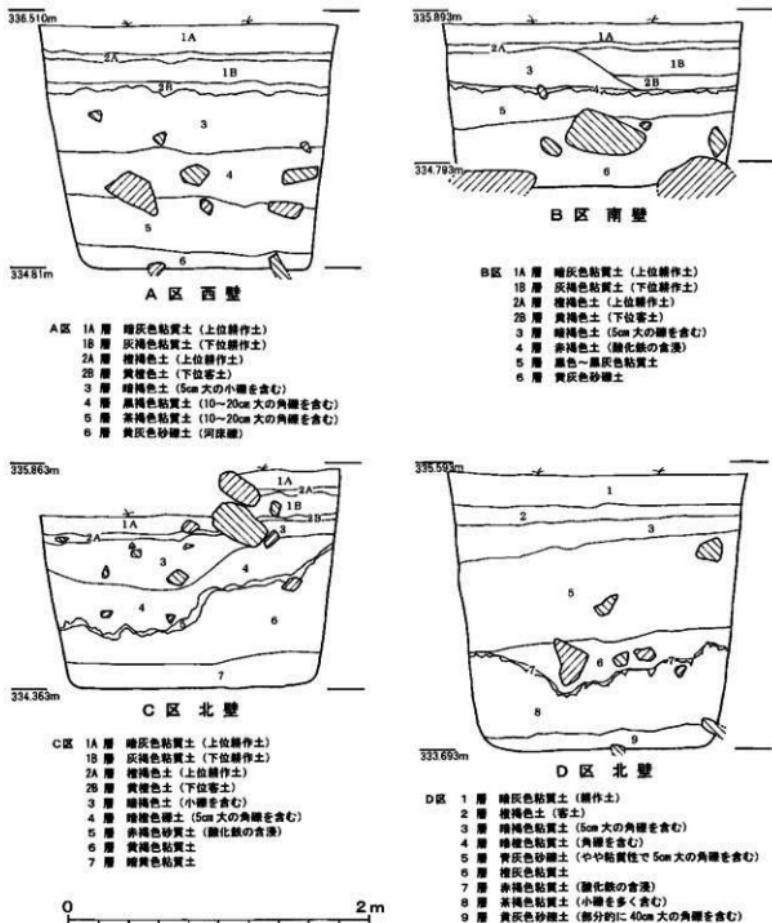
が重層して堆積していたのである。またその中には砂性をおびるもの、山地の崩壊によって角礫を多く含むものがみられることから、石谷川のオーバーフロー、また崩壊土の介入などの影響によつて生成された攪乱的様相を呈していたのであった（図版3-1・2）。そうした堆積層から出土した調査遺物（15点）は、層位的にみても疎らで、新旧のものが逆転するという傾向からも、そ



第3図 調査区配置図

のことを証明している。しかしA・B区については、前述したような影響が弱かったのか、ある程度文化堆積層が認められたため、したがって本項では両区の堆積層状況のみを掲示し、他区は除くことにした。なおD調査区の4層の暗褐色粘質土が図掲していないものの、西壁には確認できたことを断っておきたい（第4図・図版3）。

A調査区の層序は、まず1層の水田耕作土で、2次的に形成された様子が窺われ、また客土である2層でも捉えられたのであった。このような堆積状況からみて、おそらく水田の再造成によって



第4図 土層図

生じたものであろうと捉えられる。そして3層は、やや粘質性を帯びた暗褐色土で、全体的には5cm大の礫を多く含み、その上位部には炭化物も多くみられた。その層厚は、水田造成時に深く削平されたと思われる山寄りの南東側が薄層で、その逆に河寄りの北西側に向かって厚く堆積していたのである。その中には削平などで搬入されたと考えられる縄文土器片（8点）・石鐵（1点）が出土したのであった。

茶褐～黒褐色の4・5層は、色調的から分層したものの、粘質性の同一のものと思われるものである。その層厚は40～70cmを測り、下流側に向かって下降して堆積し、その層中には10～20cm大の角礫を含んでいた。これは層状及び土質からみて、山地からの地すべり的崩壊土の堆積と思われる。そのうちの前者からは、43点の縄文土器片や石器剥片6点が認められ、後者も土器片を中心としたもの33点が出土した（第1表）。これらのうち土器は、主に縄文後期末のもので、その中には晩期のものも混在しているという状況であった。なお両層とも遺構は確認できなかった。その下位の6層は、小礫～20cm大の円礫を含む河床礫層である。下位へ掘削を試みたが、遺構・遺物は検出されず、また湧水にみまわれ掘削は困難となつたため、中止することにした（第4図・図版2-5・3-3）。

B区の1～3層までの堆積状況は、厚薄差はみられるものの、A区と同様な層順であった。そのうちの2層からは数点の陶磁器が収集され、そして3層では搬入したと考えられる土器片・石器剥片など24点が出土し、その下位部では遺構と思われるものが検出された。つぎの4層は、酸化鉄が下位層に含浸した赤褐色土であった。

本区のみに認められた5層は、やや砂質性の黒褐～黒灰色土で、その層厚は20～30cmを測り、山寄りの東側に向かってやや厚く堆積していた。遺物には上器片80点、石器剥片7点が上位部に、そして下位部に土器片57点、石器剥片3点のものが出土した（第1表）。これらの遺物の垂直分布、また土器形式などからみて、縄文後期前半期を中心とする文化層であったと想定したのであった。ただし遺構と思われるものは認められなかつたのである。そして6層は、黄灰色を呈した河床礫層であった（第4図・図版2-6・3-4）。

（2）遺構の状況

出土区名	層名	縄文土器	石鐵	黒耀石(くろ)	黒耀石(白)	剥片	陶磁器	鉄滓	計
A区	3層	8	1						9
	4層	43	1		4	1			49
	5層	30				3			33
B区	2層						2		2
	3層	21	1		1	1			24
	SK01(3層)							216.8 g	—
	3層上位部	80	1		3	3			87
	5層下位部	57		1	2				60
C区	2層	1							1
	4層	1							1
	6層上位部	1							1
D区	4層	4				1			5
	5層	4				1			5
	6層	3							3
計		253	4	1	10	10	2	—	280

第1表 広戸B地点遺物集計表

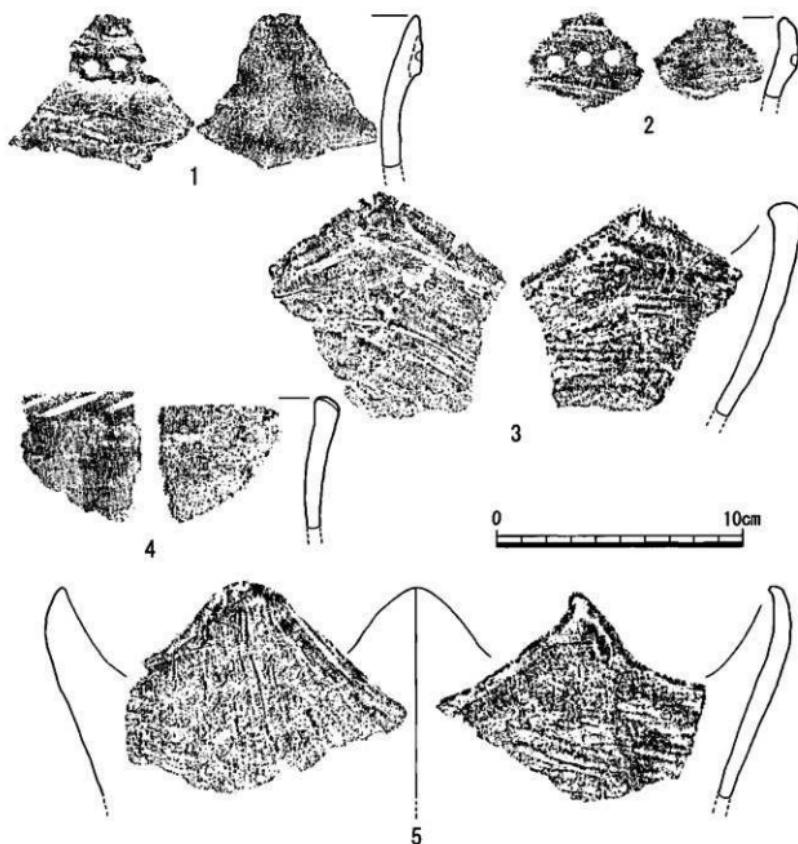
遺構においては、B区の3層と4層の層界面に上坑状なもの1基が認められた。その坑形は円形状を呈し、径40cm前後を測って、深さ約14cmであった。その坑内の埋土には暗褐色土系のものが陥入し、部分的に灰土、炭化物も認められ、また鉄滓(216.8g)も共伴していた状況から、製鉄などに関連した炉としての機能をもったものではないかと想像している(第1表)。なおこの遺構については実測したもの、本稿に載せるほどの詳細な資料が得られなかつたため、図化してまでは掲げなかつた。

(栗田)

4. 出土遺物

(1) はじめに

遺物の採り上げについては、1・2層は層位の銘記のみとし、それ以下の層位においては平面・



第5図 実測土器(1)

垂直分布とともに原位置方式で行なった。これらの出土遺物のうち、鉄滓（216.8 g）、陶磁器（2点）以外は総て縄文遺物（278点）であり、そして層序からみると鉄滓・陶磁器はB調査区の3層、縄文遺物は調査区によって多少異なる（山地からの崩壊土、右谷川のオーバーフロー等）が、凡そ黒っぽい暗褐色系を主体に後期前半期のものが、そして茶褐色系では晩期のものが出土したものであった（第4図・第1表）。

縄文遺物においては、縄文後期前半期のものを中心（多少、後期末～晩期のものもみられるが）とした上器片が253点で約91%を占め、石器類では石器剥片（20点）、石鏃（5点）の25点と僅少であった。またこれらの縄文遺物を調査区別にみると、水田中段の南端に設けたB調査区で171点と最も多く、そして上段のA調査区の91点、13点のD調査区、3点のC調査区とつづき、概して南半部に多出するという傾向がみられたのであった（第3図）。

これらの出土遺物については、次項で本遺跡の特徴的なものと思われるものを抽出して紹介していくことにすると、土器片においては形態が把えやすい口縁部を中心みていくことにしたい。

（2）実測上器（第5図・第6図・図版4-3・図版5-1）

1・2は、いずれもA調査区で出土したもので、口縁部外面を肥厚させ、そこに巻貝の頂部で横方向に列点状に押圧したものの。色調はいずれも灰褐色を呈し、焼成は良好である。3～4は、中津式系に併行するもの。うち3は、粗製系の波頭部片で、外面には細かい曲線の沈線を施す。内外面とも条痕調整で、色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含んでいて、焼成とも良好であるといえるものではない。4は、口縁端部はやや平坦で、そこに斜めに刻目を施している粗製系のもの。色調は赤褐色で、おそらく中津式直後のものであろう。

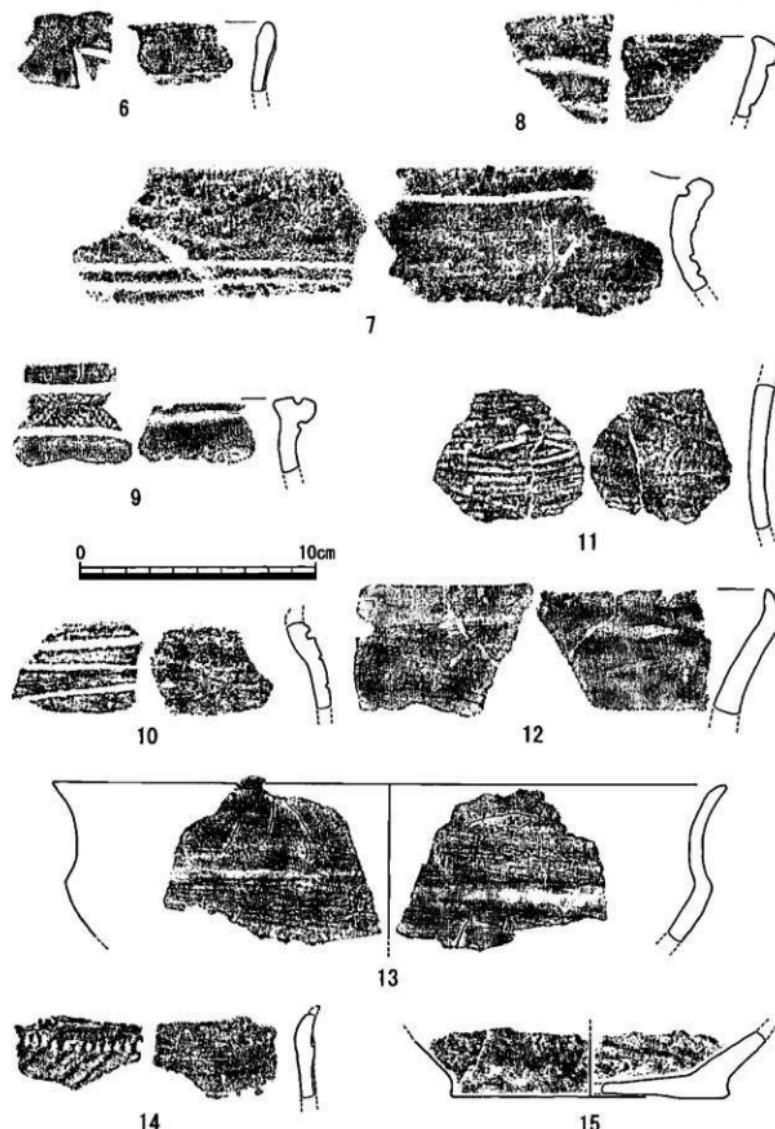
5は、B調査区から出土した粗製系の波頭部片。内外面とも条痕で、端部はヘナタリで平坦に調整しているもの。色調は橙褐色を呈し、胎土・焼成とも堅致である。おそらく福田KII式系に併行するものであろう。6は、波状を呈する口縁部片。細片で施文形態はわからないが、外面には角ばった沈線が施され、色調は赤褐色を呈している。

7は、B調査区に出土した粗製系の鐘崎式上器の口縁部。器肉は厚く、口縁部は短く外側に反り曲がるといった形態のもの。外面の頸部には3条からなる太書きの沈線、また口縁端の内側にも横走の1本を施す。胎土には砂粒を含み、色調は橙褐色を呈する。なお、後掲の10も同系のものである。8・9は、福田KII式のもので、両者とも口縁端部は肥厚して平坦である。前者の外面には太い沈線、後者の精製のものは口端部にも施され、磨消縄文を施すとする。

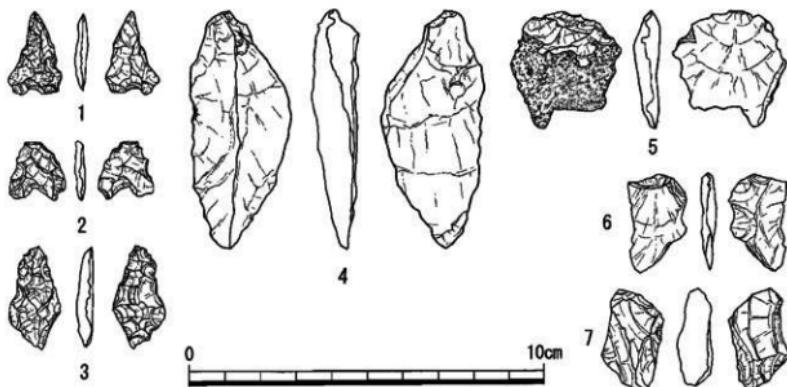
10は、胴部片と思われるもので、内外面とも巻貝による条痕調整としたもの。胎土は緻密で、色調は赤褐色を呈している。11は、半精製系のもので器肉は厚く、頸部から開くように立ち上がり、口縁部は△形状に肥厚させたもの。内外面ともヘラミガキの調整としたもので、後期末ないしは晩期初頭にかけての深鉢系のものと思われる。12は、Sの文字状した器形のもので、内外面ともヘラミガキ調整した精製系の浅鉢。胎土・焼成とも堅致である。おそらく晩期前葉のものと思われ、色調は黒褐色を呈する。13は、口端部を欠く粗製系の口縁部。外面には爪形ふうの刺突列点文がみられ、その部下には指ナデのシワらしきものが捉えられる。おそらく原下層式に併行するものであろう。14は、接置面が平坦で、色調は橙褐色をした底部。

(3) 実測石器（第7図・図版5-2）

1～3は石鎌で、1・2は安山岩質、3は黒耀石製のもの。うち1・2は、丁寧な成形のものとは



第6図 実測土器（2）



第7図 実測石器

いえず、不等形である。3はB調査区から出土したもので、基部を欠くが、細部調整がゆきとどいている。4は、縦方向に割裂した安山岩質の剥片で、2次的な細部調整はみられないが、側縁部には銳利さが捉えられることから、削器に代用されたものかも知れない。5は、背面に自然面がのこる安山岩質の剥片。いずれも2次的な細部加工がみられない。6・7は、乳白色した姫島産と想定される黒耀石の剥片。いずれとも2次的な細部加工がみられない。

5. 成 果

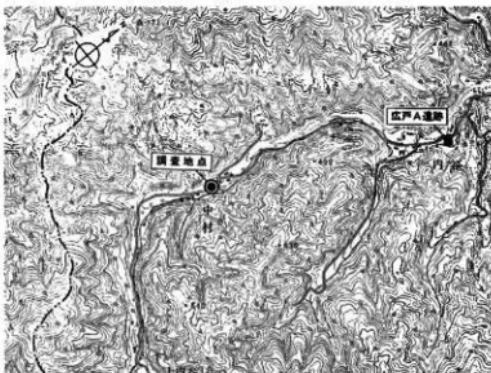
石谷川の数次によるオーバーフロー、また山地からの崩土の嵌入などの影響が看取されるなど、けして良好な遺跡であるとはいえるものではなかった。ただし中津・福田KII式といった縄文後期前半のものを中心に多量に出土したことで、今回の調査では遺構の検出を確認できなかつたものの該当期における集落跡であった可能性が強い。また、後期末や晩期のものも多少みられたが、これは山地からの崩土中に検出されたことなどからみて、開発外の所産のものとみられる。

いずれにしても、本調査地点は遺跡であることには間違いでないが、石器類が土器片に比べて極めて少量ということや、また未確定な屋敷式土器を伴っているなど、考古学上貴重なものであることも確かであり、保護対策が必要である。

(渡辺)

第2節 向屋敷地点

1. はじめに



第8図 向屋敷調査地点と周辺の遺跡

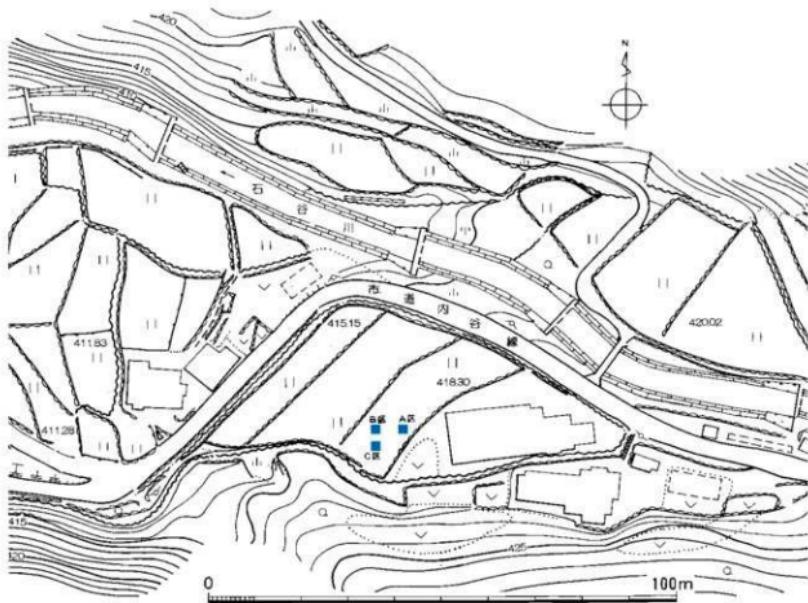
本地点の分布調査は、第2章の第1節で報告しているとおり「益美2期中山間地域総合整備事業」に伴って実施したのである。

所在地は益田市匹見町石谷口497番地で、調査期間は平成17年6月2日から同月13日まで行なった。本調査では下記に報告しているとおり、遺物包含層、またこれに準拠できると想定される文化遺物はみられなかつたが、実施したという便宜上、一応はその状況なりを簡潔に記述しておくことに止める。

2. 調査対象地とした理由

調査対象地は、広戸B地点から南側へ石谷川沿いに約1.3km遡った字（あざ）名を中村と称されている場所である。周辺は北—南方向に石谷川の流路で開口しているものの、東—西方向は30m程度測って山地に阻まれ、まさしく“谷間”といふ方がぴったりと当てはまるという地形で、指呼（中村）には周知の遺跡はない。

こうした地勢下にある中で、石谷川と比高差約3mばかり測って緩傾斜を形成し、そこに3段からなる水田のうちの、上段のものが立地上からみても可能性が高い判断したのであった（第8図・図版6-1-2）。



第9図 調査区配置図

3. 調査区の設定

(1) 調査区の設定

該当の水田は字（あざ）名を向屋敷といい、河寄りの北東側は嵩（かさ）上げの可能性があったので、南西（山寄り）側に2mの方形のものを3区設けて実施することにした（第9図）。

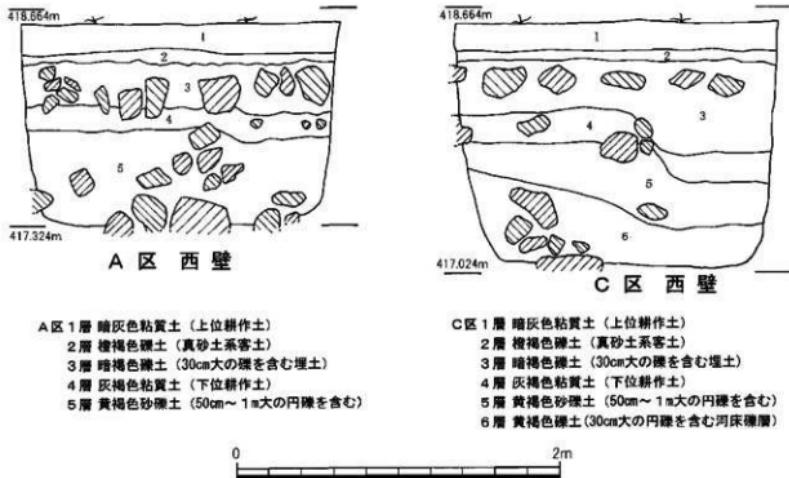
（2）層序のようす

上から耕作土としての暗灰色粘質土（1層）、2層は客土と思われる橙褐色礫土、3層は30cm大の円礫を多く含んだ暗褐色礫土、4層は灰褐色粘質土、5層は50cm～1m大の円礫を多量に含んだ黄褐色砂礫土というように堆積していた（第10図・図版6-3、-4、-5）。

こうした堆積状況であったが、ただ1～3層にかけてのものは嵩上げされて造成したものだった（昭和初年）ということから、これらは自然堆積土というものではなく、またその下位の4層が當時以前の耕作土に当る、といった具合であった。耕作土を除く、いずれの層とも円礫が多く、5層においては填充するといった状況であって、そこには右谷川が大きく影響した様子が窺われたのである。

掘削においては1.3～1.6m掘り下げたが、基盤層と想定される河床礫層に至って止めるに至ったのであった。なお、各層とも文化遺物といえるものではなく、また遺構といえるものも確認することができなかつたのであった。

（渡辺）



第3節 石ヶ坪遺跡地点

1. はじめに

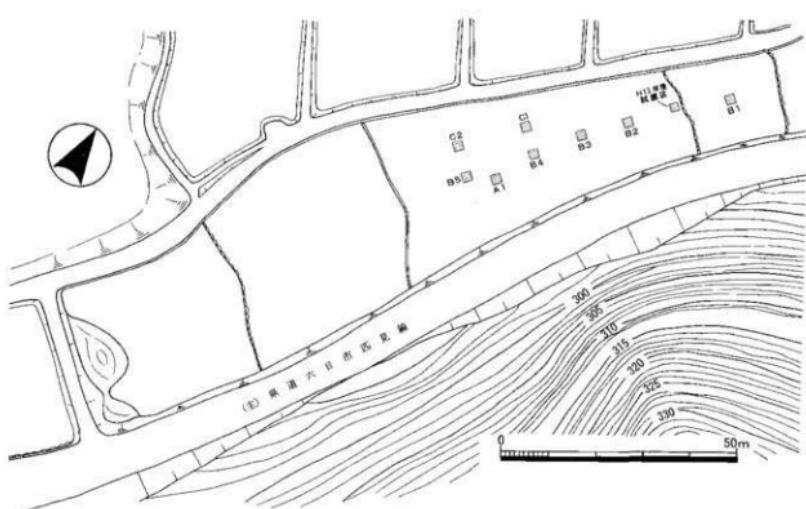
本分布調査は、石ヶ坪遺跡（市指定）における正確な範囲確認が行なわれていなかったため、益田市所有地のうちの、未だ不確定であった北東（下流）側を中心に実施したものである。

所在地は島根県益田市匹見町紙祖イ530番地ほかで、南西（上流）側の200m地点には紙祖川と七村川とが相会し、その狭間の尾根筋には比高約130mを測る小松尾城跡があつて、要害的地形を形成している（第11図・図版7-1-2）。一方、北東側は紙祖川が形成した狭長な河岸段丘が2.5kmにわたって拓け、間口しているといった地形地である。なお、当

地点域は旧水田であったが、今では盛土や刈上げなどを行なわれて管理され、その現地表面の標高は290~291mを測るといった地点域である。



第11図 石ヶ坪遺跡地点と周辺の遺跡



第12図 調査区配置図

2. 調査区の設定

石ヶ坪遺跡といわれて、保存されている面積などについてみると、そこは孤状を呈した北東一南

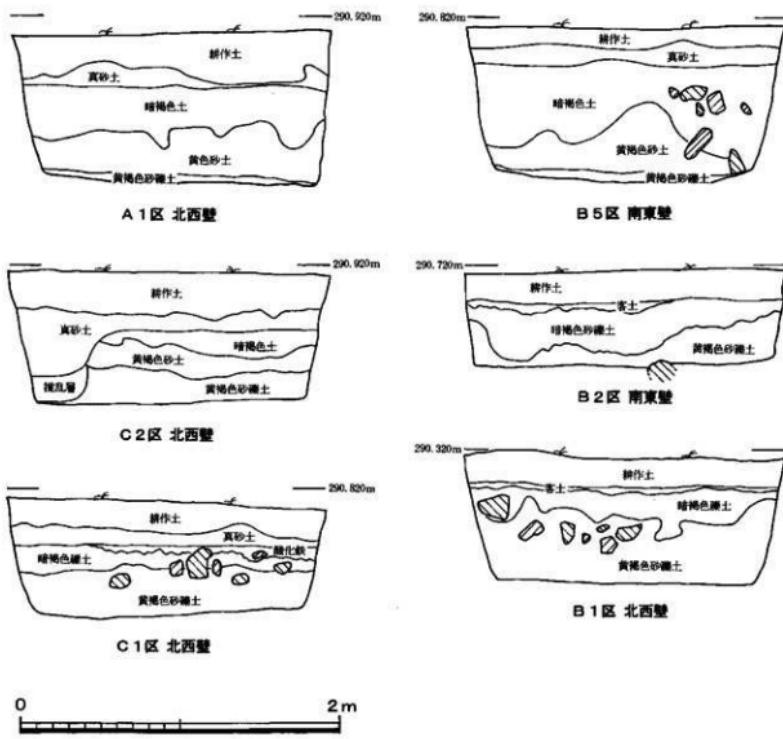
南北方向の長さ約150m、幅は北西—南東方向の広いところで約40m、南西側にいくほど狭まって、その端部の幅は14mを測るといった不整地であって、その面積は凡そ4,300m²を測る範囲である。

調査区の設定にあたっては、平成元年度の調査時の検出傾向、また未調査であった北東半部などを考慮し、任意に南西（上流）側から長さにして約80mのところを起点にして、その下半にかけて凡そ70m範囲を掘るために、その配置間隔については第12図のとおりであるが、包藏地の可能性が高いと想定される南西側を密に、そして低いと判断した北東側を疎間に測って、2mの方形区を7区とした。ただ掘削していく段階でA1区のように、出土遺物の疎・密をみるために、さらに増設したので、最終的には8調査区、調査面積は32m²となった。

3. 調査概要

(1) 堆積層序と遺物包含層

本地点の基本的層序の事例については、掲図していない（包含物が少なかったため）が、B4区



第13図 土層図

のものが妥当なものであると想定した。その層序状況によると、上位から耕作土（旧水田の表土）、2層は客土（小礫を含む灰色土）、3層は暗褐色土、4層は黄褐色土、5層は砂礫土の順で堆積していたのである。

B4調査区のものを基本にした理由は、例えば南西（上流）側のもの（A1・B5・C2）には、平成元年度の調査中途であったが、保護のために上位部に真砂土を搬入している（2層）ということからである。そして、それ以後の北東側の大部分においては、遺物包含層である暗褐色土層系が薄く、しかもそれが礫を多く含んだ層に変化し、遺物が皆無であるという状況などから想定したのであった（第13図・図版8-5、-6・図版9-1～-6）。

（2）遺物出土状況

層序については上述したとおりであったが、遺物包含層はこのうちの暗褐色土の3層であった。これは南西端部のA1・B4・B5・C2区のものでは、20～60cmと厚く堆積し、礫石もほとんどみられず、遺物は万遍なく、それもB5区では縄文遺物が692点出土したという状況であった。ただ、これらの調査区以外の北東側にいたってのものには本層は薄く、そして多量の石礫を含むとともに、遺物を確認することはできなかったのである。

また、1層の耕作土で捉えられたものもあったが、これは営田時などにおける攪乱的に搬入したものとみられる。したがって諸状況からみて、包含層としての準拠できる遺物が捉えることができるのは、暗褐色土の3層ということになり、それを調査区で多出した順にみると、B5区の（692点）・C2区（88点）・A1区（67点）・B4区（16点）ということであった（第2表）。なお遺構については、狭掘という状況であったためか、捉えることができなかつたのである。

出土区	層名	縄文土器	打製石斧片	石礫	乳白色石礫	黒耀石（白）	石器剥片	石器	チャート	螺貝	計
A1区	1層耕作土	1									1
	3層暗褐色土	53	1		2	7	3				66
B2区	1層耕作土				1	2					3
B3区	1層耕作土	2									2
B4区	3層暗褐色土	15				1					16
B5区	3層暗褐色土	643		1	1	12	29	4	1	1	692
C1区	1層耕作土	3									3
	3層暗褐色土	10									10
C2区	3層暗褐色土	66		2		2	5				75
	腐土	3									3
計		796	11	3	11	17	44	7	1	11	871

第2表 石ヶ坪遺跡地点遺物集計表

4. 出土遺物

（1）はじめに

採り上げについては耕作土からのものは（銘記のみ）別にして、他は総て平面・垂直分布ともに原位置方式を用いて行った。これらの遺物は土器片796点、石器類75点の計871点（第2表）で、うち8.6%が石器類で少なく、ほとんどは土器片で占められ、出土層序は3層を依頼するものであるということができる。

これらの土器類の95%以上は中津式に併行するもので、平成元年度の調査においては、これにつづく福岡KIIや鐘崎式、そして縄文文系の彦崎式などといったものが30%程度以上みられたものとは大きく異り、同系式のものは数片にすぎなかつたのである。これは、今回の調査が深位度

に至って掘削しているためだったと考えている。また石器類については、1点の打製石斧、そして、7点の石錐、石鏃（4点）などが出土しているにもかかわらず、それに比べて安山岩質などの剥片がすくないということは以外であった。

これらの傾向、特徴的なものと思われるものを一部抽出出し、次項で概説しておくことにしよう。

（2）実測遺物

土器類（第14図・図版10-1）

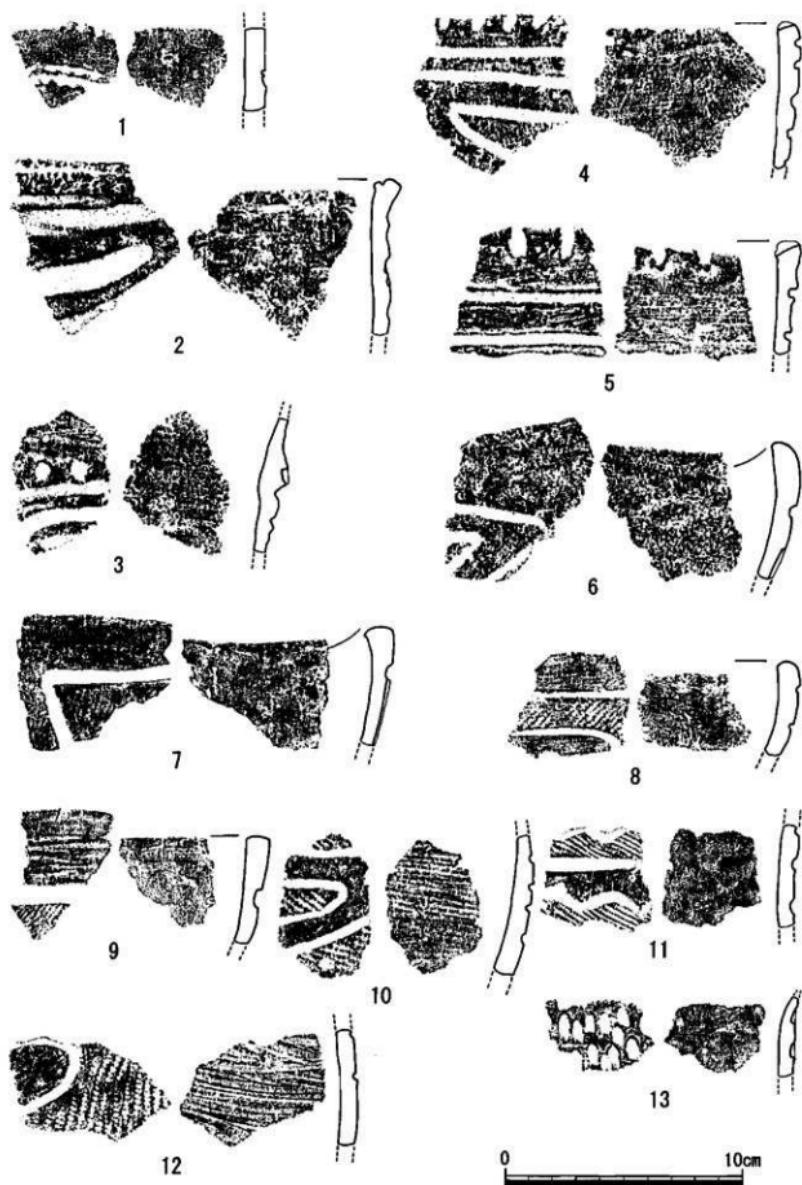
1・2は、滑石混入土器で、前者は並木式、後者は阿高式土器である。このうち並木式といわれるのは、外面に刺突部が段状なすような施文具をもち、曲線状に押引いて描いたもの。凹線はみられず、外面は灰褐色、内面は茶褐色を呈する。2は、阿高式といわれる口縁部、口唇部は肥厚して外傾し、その円みおびた端部には1本の沈線を施す。そして口縁外面には、曲線おびた2本の横方向の凹線文がみられ、外面は灰褐色、内面は茶褐色を呈して焼成は良好である。

3は、口縁部辺のものであるが、その端部を欠く。口縁部外面は貼付けの△形状の突帯をつくり、その頂部に巻貝の頂部をもって押圧し、その下位には、巻貝の腹面による沈線というよりは、凹線というべき文様を数条施文した後、外面をナデで仕上げている。色調は内外面とも灰褐色を呈し、焼成は良好である。こういった形態のものは、山口県の月崎・的場・屋敷遺跡などでみられ、中村友博氏のいう「屋敷式」というものに併行するものであろう。

4～12は中津式、またこれに並行するもので、うち8までは口縁部、それ以外は端部を除く未定の部位片。4・5は、口縁部端部に刻目を施しているもので、いずれも外面には2本の横走の太い沈線を施す。前者はその下部に無結の弧状沈線を施文し、内外面ともナデ仕上げ、そして後者の外面はナデ、内面のケズリは粗い。6は、粗製の波状部片。口縁部から外傾ぎみに立ち上がり、頂部で肥厚して内傾するといったもの。外面には横方向の弧状曲線の沈線で描き、その端部は尖って連結する。内外面ともナデ仕上げで、色調は灰褐色である。

7も、粗製系の口縁部で、肥厚したものというとまでは至らず、その端部は平坦ぎみに強いナデを施すが、その捩れが内側へ張る。また外面には棒状具による太い沈線がL文字状に描かれ、内外面ともナデ。色調は灰褐～茶褐色を呈し、胎土は緻密で焼成は良好である。おそらく波状へ至るまでの口縁部のものであろう。8は、精製系の磨消繩文土器。器肉厚は一定で、円みおびて立ち上がるところをみると、ポール状の器形のものと思われる。そして沈線で区画した繩文帶には貝頂部による疑似に施したもので、押圧が弱く、また跡切れ部分もみられる。内外面ともミガキで、色調は淡い赤褐色。

9は、口縁部を肥厚したもので、端部は平坦、外面には太い沈線がみられ、その部下には単節繩文が施されている。内外面とも条痕調整の後、ナデ仕上げとし、色調は黄灰色。10は、胴部と思われる粗製系のもので、外面には横走の長楕円形で描いた磨消繩文土器片。内面は条痕調整のままで、色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含んで粗い。11・12も磨消繩文土器。前者の外面には太い横走の直線、ジグザグの沈線で区画し、繩文帶には細い単節繩文で施文している。内面はナデで、色調は橙褐色、外面は黒褐色を呈し、胎土には2～3mm大の石英を含む。後者の繩文部は無節のもので、押圧が弱いため、跡切れた部分もみられる。内面は条痕調整のままで、色調は両面とも

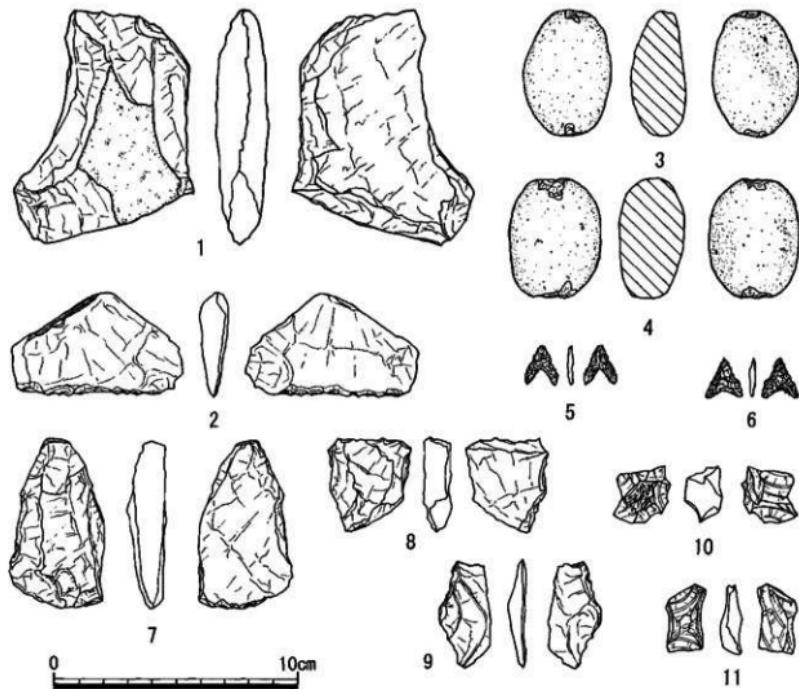


第14図 実測土器

褐色である。1・3は、竹管状施文具をもって、抉るように連続して刺突したもので、拓墨面は涙滴状の文様を呈する。器肉は厚いといえるものではなく、内外面ともナデで、灰褐～暗褐色である。おそらく中津式期以前の九州系のものと思われる。

石器類（第15図・図版10-2）

1は、A1区の3層から出土した基部を損失する凝灰岩質の打製石斧で、刃部の右辺も損失する。周縁から数打の粗い打撃で成形された後、さらに縁部を調整した2次の加工がみられる。背面には一部自然面がのこり、腹面は一擊的な単裂の成形である。2は、安山岩質の△形状した削器。基部の左辺に磨切りの痕跡がみられることから、石斧などの破損片を作用したものであろう。約6cmを測る刃部は直線的で、そこに両面からの緩斜度の細部調整がみられるもの。



第15図 実測石器

3・4は、両端を打欠く石錐で、前者は堆積岩質、後者は花崗岩質の円錐を利用したもの。うち3は、長径5.2cm、短径3.5cmで、重さ約49g。4は長径4.7cm、短径3.8cm、重さ約70gを量るもの。5・6は、安山岩質の無茎の石錐で、前者は基部の抉入が深く、後者は円みおびる。两者とも、丁寧な剥離調整され、均整な美形のものである。

7～11は、剥片類。このうち7は、1と同質の凝灰岩質のもの。右辺側に利器自体（打製石斧

など）からの損欠したと思われる単裂痕がみられることから、打製石斧の損欠的な剥片と思われるもの。8・9は、安山岩質のもので、うち8は方形状をし、縦長に剥離した面がみられることから、剥片石核であろう。9のものは、両面とも打点が左辺にあって、背面には強いフィッシャー痕が表出するが、腹面は単裂する横長のもので、他には2次的に細部加工した根跡はみられない。10・11は、乳白色の黒耀石の剥片で、いずれも2次的な加工はみられない。このような姫島産と想定されるものは、本調査では17点出土している。

5、成 果

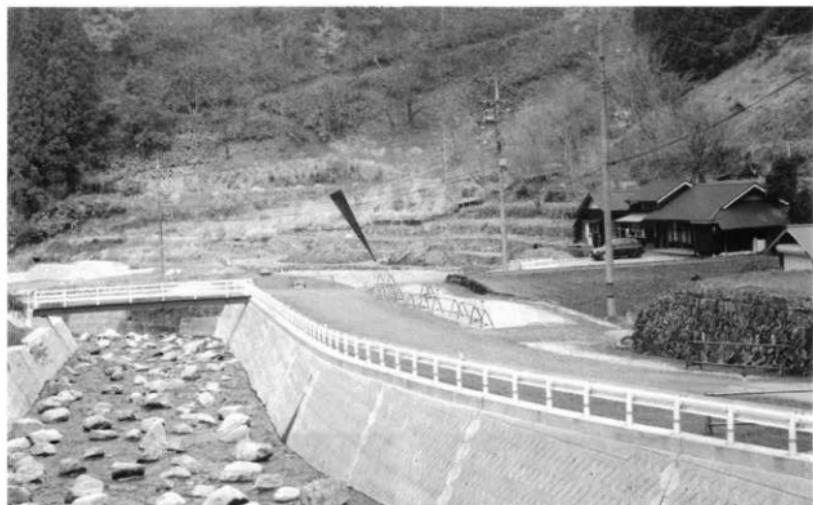
本調査の目的は、石ヶ坪遺跡地内における正確な包蔵範囲を把握するものであった。上述した報告のとおり、一応の成果を得ることができたものと考える。

その対象は、不確定であった北東側を中心に実施したものであるが、該当地点域の大半は、数次による河流のオーバーフローがあったことが看取され、それが端部方向に至っていくほど激しく、文化包蔵物も皆無という状況であったのである。とくに紙祖川が流下する北西側がそうで、耕作土の直下は円礫が露頭するといったような状況であった。ただし南西端の起点から17m北東側へ、そして北西—南東方向には約20m測った範囲においては、文化包蔵物が遺っていることがわかつたのであった。

しかも、地点によっては疎・密がみられたものの871という点数は、狭掘の面積からみて良好な包蔵地であることが確認できたことは大きな成果であった。また出土した土器の形態からみると、9割以上が中津式、それに併行するものであることから、本遺跡の盛行期が縄文後期初頭にあったことが立証できた。そして数点の阿高・並木式土器は該当期に位置付けられるものであること、また屋敷式土器もそうである、ということが確認できたことは、この上ない成果であったということができるよう。

(渡辺)

図版1 広戸B地点



1. 南西からみた調査地点の遠景



2. 北東からみた調査地点の近景

図版2 広戸B地点



1. 発掘風景



2. 土器片の出土状況



3. 土器片の出土状況



4. 石器の出土状況



5. A調査区の堆積状況（北壁）



6. B調査区の堆積状況（東・南壁）

図版3 広戸B地点



1. C調査区の堆積状況（北壁）



2. D調査区の堆積状況（西壁）



3. A調査区の完掘状況（南から）



4. B調査区の完掘状況（北から）



5. C調査区の完掘状況（南から）



6. D調査区の完掘状況（南から）

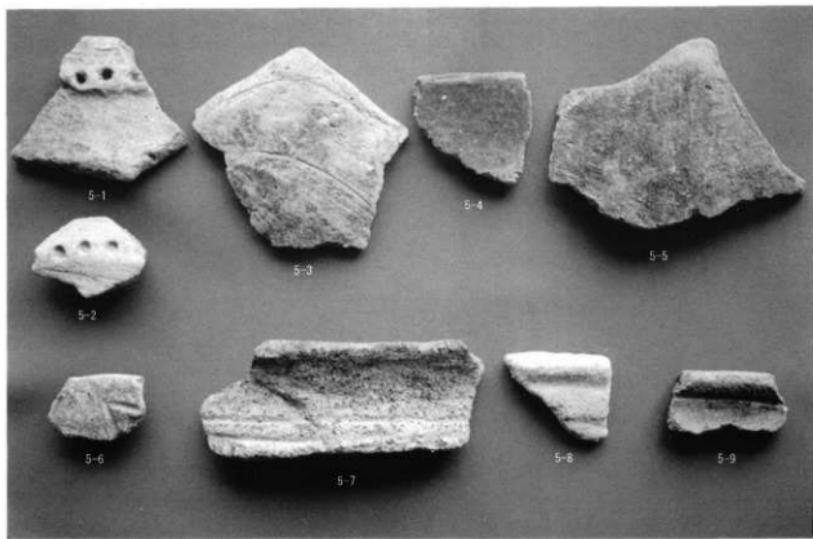
図版4 広戸B地点



1. 繩文土器片の出土状況

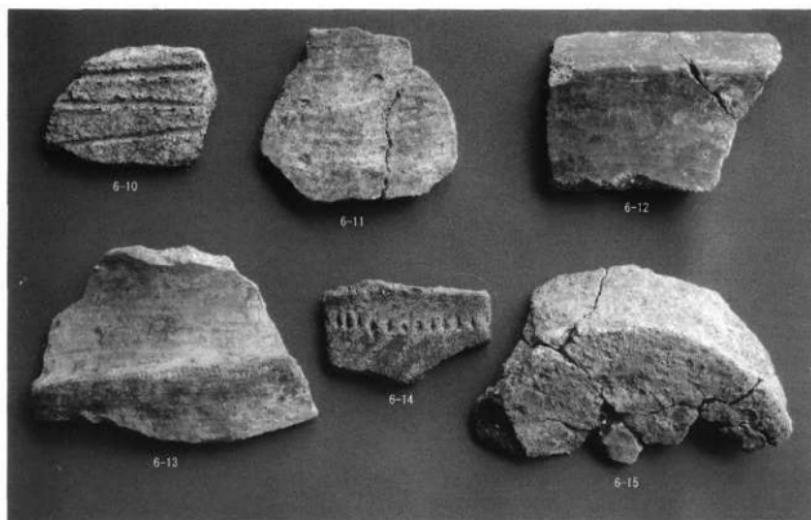


2. 黒曜石片の出土状況

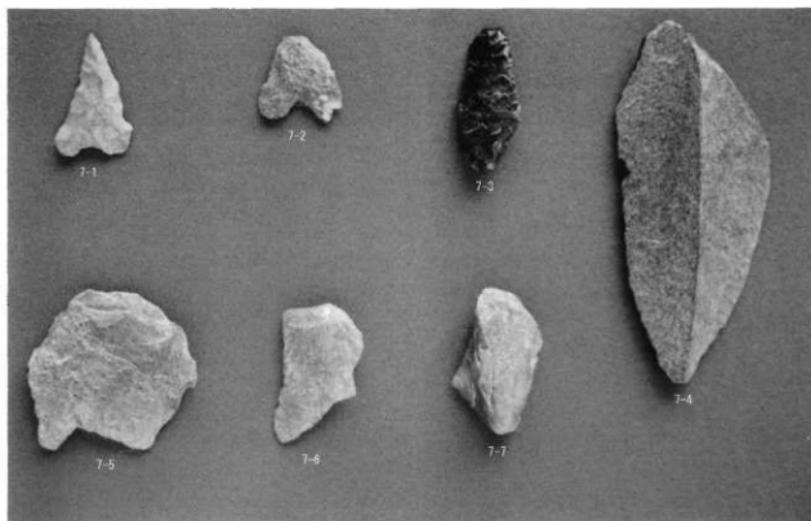


3. 実測土器（1）

図版5 広戸B地点



1. 実測土器 (2)



2. 実測石器

図版6 向屋敷地点



1. 北からみた調査地点遠景



2. 南からみた調査地点遠景



3. A調査区の完掘状況（南から）



4. B調査区の完掘状況（南から）



5. C調査区の完掘状況（南から）

図版7 石ヶ坪遺跡地点



1. 北北東からみた調査地点遠景



2. 北東からみた調査地点近景

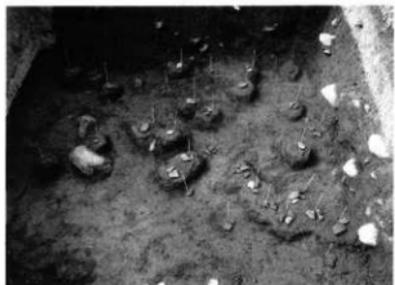
図版8 石ヶ坪遺跡地点



1. 発掘風景



2. A1調査区の遺物出土状況（南東から）



3. B5調査区の遺物出土状況（南西から）



4. C2調査区の遺物出土状況（南西から）

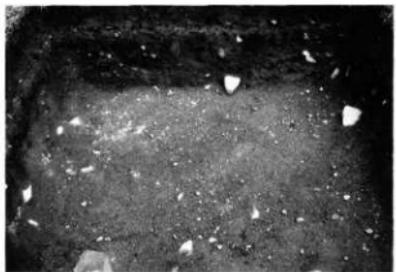


5. A1区の堆積状況（南東から）

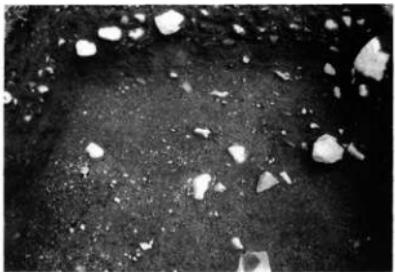


6. B1区の堆積状況（南東から）

図版9 石ヶ坪遺跡地点



1. B2区の堆積状況（南東から）



2. B3区の堆積状況（北西から）



3. B4区の堆積状況（南西から）



4. B5区の堆積状況（北西から）

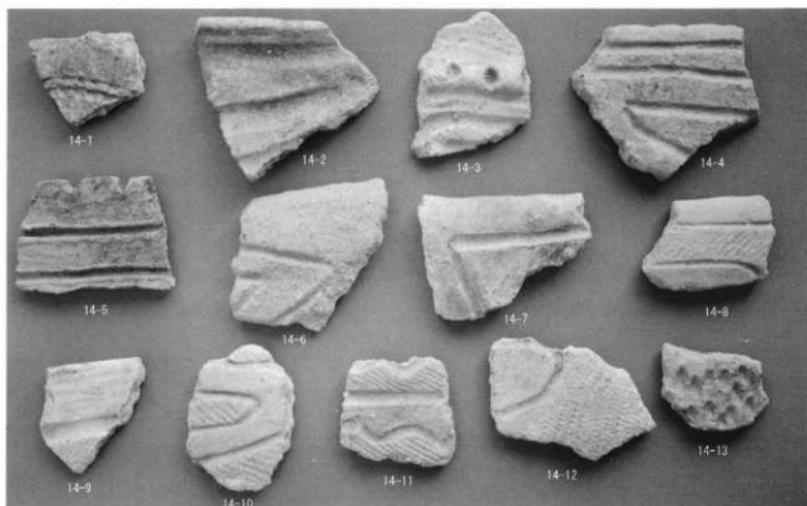


5. C1区の堆積状況（北東から）

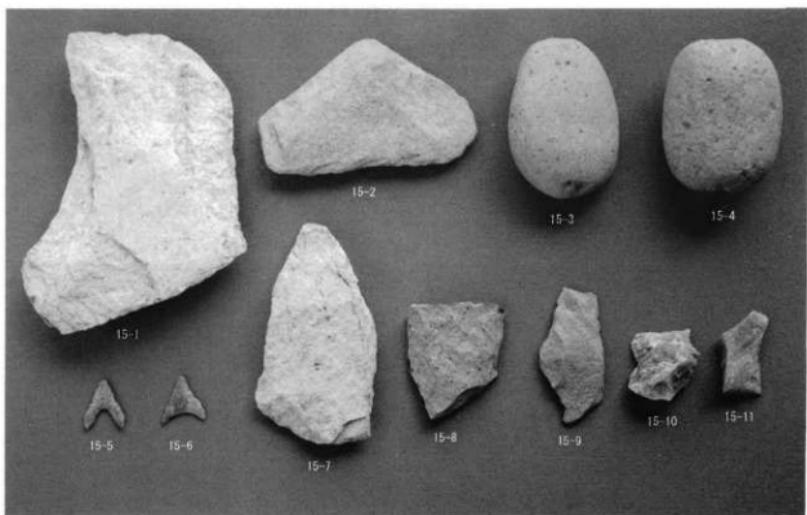


6. C2区の堆積状況（南東から）

図版10 石ヶ坪遺跡地点



1. 実測土器



2. 実測石器

ふりがな	しないいせきしょうさいぶんぶちょうさほううこくしょ 18
書名	市内遺跡詳細分布調査報告書 XVII
副書名	益田市四見町埋蔵文化財調査報告第49集
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	渡辺友千代・栗田美文
編集機関	益田市教育委員会文化振興課（益田市埋蔵文化財四見調査室）
編集機関の所在地	〒698-0034 島根県益田市赤城町18-6 (〒698-1211 島根県益田市四見町四見イ1233-1)

発行年月日 2006年3月

遺跡名①	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
ひろとげ 広戸B ちてん 地点	しまねけんますだし 島根県益田市 ひきみちょういしたに 四見町石谷	32204		34度 32分 12秒	131度 55分 42秒	2005.04.14 ～ 2005.05.31	ほ場整備
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
集落	縄文		縄文土器、石器				
遺跡名②	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
ひからいわしき 向屋敷 ちてん 地点	しまねけんますだし 島根県益田市 ひきみちょういしたに 四見町石谷	32204		34度 31分 31秒	131度 55分 15秒	2005.06.02 ～ 2005.06.13	ほ場整備
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
遺跡名③	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
いしがくづ 右ヶ坪 いせきちてん 遺跡地点	しまねけんますだし 島根県益田市 ひきみちょうし 四見町紙祖	32204		34度 33分 5秒	132度 0分 11秒	2005.10.03 ～ 2005.10.31	遺跡範囲 確認
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
集落	縄文		縄文土器、石器				

平成18年3月24日 印刷

平成18年3月31日 発行

益田市匹見町埋蔵文化財調査報告第49集

市内遺跡詳細分布調査報告書XVIII

発行 益田市教育委員会
島根県益田市常盤町1番1号

印刷 西村印刷所
島根県益田市高津六丁目27番8号
